平洋戦争の最中。敗戦の一夜明けると考え方が一変。世の中に対しての不信感が募ったというのです。2月8日の掲載面でも、日本は明治維新の時もそれまで260年間やってきたことをガラッと変えた…と言っています。今や私たち戦後世代も高齢者の仲間入り。安倍元首相も岸田首相も戦後世代です。ロシアのウクライナ侵攻と中国の動きをにらんで国の防衛についてにわかに活気づいている今、太平洋戦争を体験した人たちがいなくなるという事が少し怖いような気がします。国を超えて滞在しながら学ぶミネルバ大学では「正解のない問題に対して深い学びが得られる」と言います。人間の英知を結集し国家間のイデオロギーの違いを超えた相互理解を実現させてほしいものです。

ドラゴンへの階段 第46回（連載エッセイ版）

「いのちと関わる機会」佐藤　洋祐

寒さ厳しき折ですが、さらに冬の厳しい北海道・十勝にて1月末から2月初を過ごしました。妻の実家がそこにあり、必然として繁く訪れる場所でしたが、コロナ禍を経て3年ぶりの訪問になっていました。

私の今の居住地である千葉県佐倉市から、かつて開拓時代に十勝士幌の地に入植された方々があり、その新転地に「佐倉」の名前を命名されました。現十勝士幌町の佐倉地区、と呼ばれる場所です。両者の交流を、との人々の思いから、今からおよそ30年前、両地にある佐倉小学校の児童どうしがお互いの地を訪れる、交換訪問という形での交わりが始められ、長く継続されてきましたが、2019年度をもって士幌の佐倉小学校が閉校になり、その歴史が一幕を閉じました。その話しをうかがって、なんらかのつながりが存続できればとの思いから、実行委員として携わっている千葉県佐倉市の音楽イベント「佐倉城下町ジャズサーキット」に十勝のキッズミュージシャンを含むバンドを招いての演奏会が実現したのが2019年の4月。その継続を試みましたが、それからすぐにコロナ禍に見舞われ、ジャズサーキットの開催自体が見送られ、3年以上が経っていました。

今回、十勝の友人たち、ミュージシャンたちの主催のもと、当地に招かれてジャズ教室や演奏会に関わることが叶い、ジャズによる「佐倉交流」が再開する運びとなりました。開拓時代に入植された方々、またそれを送り出された方々の思いを想像しながら、この交流を両地に今をこれからを生きる人々に実りあるものにできたら、と心に記している次第です。

挿絵：TAKAKO

さて、小学校低学年からシニア世代に渡る幅広い年齢層の十勝のミュージシャンたちとの交流の中で、音楽と向き合う姿勢など様々なトピックについて話し合う機会に恵まれ、私にとっても大きな成長につながる経験になりました。その時にお話しした内容を、ここに記させていただこうと思います、私自身がこれからの「佐倉交流」に携わる立場として、音楽のできること、音楽のちからを忘れないようにするために…

・私たちも音楽も生き物なので、自然な成長の仕方をします。上手に育てたければ、日々の適度な栄養や水やり、雑草取りや虫の駆除などの丁寧なお手入れが欠かせませんし、何より、自然な成長を待ってあげる気持ちが大切だと思います。そういう意味で、あなたの思い願った通りにあなたの音楽は成長する、とも言えます。

・情報は生き物ではありません。音楽に関する情報を何か知ったからといって、それがそのまま私たちの音楽になることはありません。音楽は生き物だから、情報とは違うものなのです。得た情報を生き物にするかどうかは、私たちがその情報にどんな心の働かせ方をしたか、にかかっています。例えばあなたが、得た情報に対して自然に感じた漠然とした感動が、情報に命を与え、あなたの土壌に植えられた種となります。種となってからも、それが芽吹き花が咲き成果となるには時間がかかることを知っていると、こつこつとした地道な日々の努力を継続しやすくなるかと思います。

音楽と同様に、多くの方々の尽力によって命を得たこの「佐倉交流」を、これから丁寧に水やり、お手入れをしながら、感動をもって、長く寛容な目でみつめながらその成長を観ていきたいと思う冬の夜です。（2023年2月11日筆）

佐藤　洋祐（サトウ ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。